

## カワバタモロコ再発見

# 自然度高い環境で生息

## 県内在来の個体群か

徳島県内では絶滅したとされていたコイ科の小型淡水魚「カワバタモロコ」の五十八年ぶりの再発見は昨年九月、県立博物館により確認された。昨年八月に県が実施した「田んぼの生きもの調査」に参加した住民の「カワバタモロコに似た魚がいる」という情報がきっかけだった。十一月には博物館と徳島大大学院工学研究科と分布状況などを共同調査。さらに遺伝子検査の結果、外から持ち込まれた可能性は小さく、もともと県内に生息していた在来の個体群であることも判明した。

発見場所は、護岸が土でできた、水生植物が繁茂する比較的自然度の高い環境だった。希少種保全のため、住所は公表していない。

県内の報告例は、資源科学研究所（現・国立博物館動物研究部）の研究者が一九四六（昭和二十

一）年に記した論文が唯一で、記録されている石井町内の生息地では現在、姿が確認できない。

県立博物館によると、カワバタモロコは本県のほか四国東部、中部以西の本州、九州北部に分布する日本固有種。最大でも全長は六センチほどで、平野部の池や水路などで群れをつくってすむ。

カワバタモロコは、高く見られた。メダカなど度成長期まで西日本で広」と同様、コンクリート張

り水路の整備が進んだことなどにより、生息域を奪われたという。

県版レッドデータブックで絶滅したとされる動物植物三十二種のうち、再発見された例はこれまでなかった。

二十八日に大阪市で開かれる日本生態学会で共同研究の成果を発表する博物館の佐藤陽一専門学芸員は「生息環境が少しでも変われば絶滅する可能性がある。いかに保全していくのか、が今後の課題」と話している。